



学校だより

～ ひびきあう心 かがやく笑顔 ふれあいの丘 斎藤分 ～

令和5年 10月 31日 11月号

横浜市立斎藤分小学校 校長 黒木 健

「多文化共生」とは何か？

校長 黒木 健

先日、横浜市立小学校長会の主催で、横浜中華街の関帝廟隣りにある台湾系の「横浜中華学院」の視察会に参加する機会を得ました。この学校は幼稚園から高等部までが一つの校舎で学ぶスタイルの民族学校で、ほぼ半数が台湾系、25%程の日本人、そして15%程の中華人民共和国にルーツをもつ中国人の児童生徒も在籍していて、必ずしも以前のような台湾系の華僑・華人に限った人数構成にはなっていないそうです。因みに横浜市内には、もう一校、JR石川町駅隣りに中華人民共和国系の「横浜山手中華学校」も立派なキャンパスを構えています。

当校の杜校長の話によれば、「以前は台湾系と中華人民共和国系とで、ある程度のすみ分けがなされていたものの、最近では（私学を選ぶ際のそれのように）、それぞれの学校の校風や教育内容を児童生徒本人や保護者が十分に比較検討した上で、最終的に入学を希望するというパターンがほとんどで、政治的な事情ともあまり関係はなく、民族的ルーツを越えた混成が進んでいる。」とのことでした。杜校長は続けて、「最近よく『多文化共生』という言葉を目にするところがあるが、異文化との出会いには大きく分けて二つしかパターンはなく、一つは、それをおもしろいと感じるか、もう一つは、それをストレスと感じるかである。」と言われました。そして「自分が出会った異文化を直ぐに拒否するのではなく、先ずはおもしろいと感じるよう努力をしてみて、もしそれをおもしろいと感じることができたのであれば、後は、自分の文化とその出会った異文化とを自分の中でいかに融合させるか、結びつけていくかを考えていくことが大切である。」と結論づけられました。

この話を聞いて、自分が会社員として中国北京に駐在していた前職時代に、ある印象的な異文化体験をしたことを突然思い出したのです。その日、ある顧客からのクレームについて中国人スタッフと夜遅くまでその解決策について話をしていた時のことです。一人の中国人スタッフが「黒木先生、明天再说（黒木さん、明日また話そう）」と言ったのです。私はもう時間も遅いし、また明日確認すれば良いかと考え、その日はそれで解散としたのですが、翌日になっても昨日の問題について口にするスタッフは誰一人おらず、そのことを尋ねても「また後で。」と繰り返すばかりで、結局その話その後、議論されることはありませんでした。なるほど、「また明日話そう。」とは、そういう意味だったのかということが後になって何となく分かり、「中国っておもしろい。」と感じ、それ以降、私の中国に対する文化的関心や中国語学習熱は、さらに高まっていきました。

横浜市内の小中学校に限ったことではありませんが、昨今、全国的に児童生徒の多国籍化が進み、外国籍や外国につながる（父母のどちらかが外国籍等）児童生徒の人数は毎年増加傾向にあります。「多文化共生」という用語が様々なシーンで用いられ、そのことについては、誰もがその必要性や重要性を何となくは理解していても、いざどのように異文化との関わりをもっていくべきなのかという段になると、その判断はつきにくいのではないのでしょうか。杜校長の話から、学校内においても、例えば、このような視点をもって児童生徒に異文化を主体的に理解させていけば、児童生徒の間に新しい相互理解を生み出させることができるかもしれないことや、またそれら異文化を自らの文化といかに融合させていくよう指導していけば良いのか、その指導法についても、一つのヒントを得られたような気になりました。これから成長していく子どもたちにも是非とも考えて欲しい事象だと思い、今回はこのようなテーマを選んでみた次第です。何かの参考になりますと誠に幸いです。